

レポート・第18回日本李登輝学校台湾研修団

日台の絆を再確認した初研修団

国立台湾大学農業経済系二年生 内田直毅

昨年十一月に実施された第十八回日

本李登輝学校台湾研修団（略称・李登輝学校研修団、衛藤慎吾団長、江成雅子（副団長））に、スタッフとして初めて参加しました。私は現在、李登輝先生が卒業された国立台湾大学農業経済系に在籍し、日本統治時代に、優秀な農業・土木技術者たちによって築かれた台湾農業の恩恵の中で、刺激的な大学生活を送っています。

今回は、第一回に次いで二番目に多い五十名の参加者で、初日に蔡英文・民進黨前主席をはじめとする各界を代表する先生方の講義、二日目の基隆と宜蘭における課外活動、最終日の李登輝先生の特別講義と、非常に内容の濃い時間を過ごし、兄弟のように深い日

台の絆を再認識した研修でした。

第1日・11月22日（木）

桃園空港や松山空港に降り立った参加者は淡水のホテルに集合し、午後三時半から李登輝基金会で行われた始業式に臨みました。郭昆文・副秘書長から歓迎の挨拶の後、李登輝基金会の活動紹介がありました。

その後、二〇〇八年から女性初の民進黨主席を務められた蔡英文先生による「台湾の未来と日台関係」と題した講義が始まりました。通訳は友愛会代表の張文芳さん。台湾、日本、アメリカとの三国間の関係の重要性を強調、親日国家台湾の若い世代への期待と、中国からの完全なる独立、中国共産党

への毅然とした態度を取るべきと訴える姿が印象的でした。講義後、参加者からは、尖閣諸島問題や次期総統選への参加の意欲などの鋭い質問が出されましたが、明言を避け、うまくかわしながら答えられました。

終了後は、近くのレストラン「海天」で食事をしながら、参加者一同、政治、経済、外交などの話で盛り上がり、楽しい時間を過ごしました。

第2日・11月23日（金）

研修二日目は、午前九時から黄天麟先生（元第一銀行頭取・台日文化経済協会会長）による「台湾の経済と日台FTA締結」の講義で始まりました。FTA締結による日台連携は不可欠で重要と強調。また、FTAは通商上の障壁を取り除く自由貿易地域の結成を目的とする二カ国間以上の国際協定であることから、締結先を慎重に考慮する必要がある、経済的優位に立つ国に産業や生産拠点が集まってしまう懸念

についても言及されました。

十一時からは、陳南天先生（台湾獨立建國聯盟主席）による「基隆と日本の交流史」についての講義。翌日午後の課外活動が基隆市訪問だったため、

基隆市の代理市長も務められた陳先生による基隆の歴史、文化、建築物の講義が前日に行われたことで、より有意義なものになりました。基隆が台湾の貿易の玄関口、そして軍事設備としても非常に重要な役割を果たしていることがよく分かる講義でした。

昼食を挟み、午後二時からは、蔡焜燦先生（李登輝民主協合理事長）による「台湾人が大切に思うもの」と題した講義。日本統治時代の教育や後藤新



蔡英文先生（第1講 11月22日）



黃天麟先生（第2講 11月23日）



陳南天先生（第3講 11月23日）



蔡焜燦先生（第4講 11月23日）

平などによるインフラ整備への取り組み、日本精神、日本人から学んだ「公」と「私」の区別など、私はいつの間にか蔡先生の熱弁に魅了され、人情味あふれる講義に感動していました。

午後四時からの本日最後の講義は、李明峻先生（台湾安保協会秘書長）で、テーマは「台湾の国際法的地位」。李先生は、複雑で混同されがちな国際政治と国際法の視点を峻別し、台湾の国際法的地位についてわかりやすく説明。中華民国と台湾の関係を国際法の観点から講義される李先生はまだ若く、今後の日台関係でも必ずや活躍されるだろうと確信しました。

当夜のスケジュールは自由行動。台

北市内へ出かけた方もいれば、淡水の夜市散策へ向かったグループも。

第3日・11月24日（土）

この日はホテルを八時半に出発、李登輝先生の生家「源興居」を訪問。新北市三芝区にある生家は、豊かな自然に囲まれているうえ、非常に立派で伝統的な建築様式の家屋でした。さらにバスで移動し、明石元二郎・第七代台湾総督のお墓を参拝。明石総督の在任期間はわずか一年四ヵ月余にもかかわらず、台湾の経済や工業の発展に必要な電力開発、鉄道敷設など政策の軸を次々と打ち出していかれました。台湾をこよなく愛し、任期の終りごろに

は過労で病気がちになりましたが、早くから「下村宏・民政長官に「自分がこの世を去ったら、骨を台湾に埋めてくれ」と遺言されていたそうです。一九一九年十月二十四日にこの世を去り、当初は台北・三板橋の日本人墓地に埋葬されたのですが、大戦後、中国大陸から押し寄せてきた難民によって墓地が占領されてしまいます。一九八七年の台北市都市計画で、日本人墓地が公園へと開発されることとなり、その際に日台各界の協力のもと、墓が掘り起こされ、現在の新北市三芝郷の福音山クリスチャン墓地に埋葬されることになったということです。

続いて、国民党の白色テロが吹き荒れていた時代、初めて公の場で台湾独立を主張し、勇敢に国民党政権に立ち向かうも、焼身自決という非業の死を遂げられた鄭南榕烈士の墓前に献花。さらに、台湾を代表する歌手、テレサテンのお墓にも参拝しました。

昼食は、基隆への移動途中に海鮮料

理レストランにて。基隆到着後は陳南天先生と合流、港内遊覧船に乗船して湾内クルーズを楽しみました。あいにくこの日は天気が悪かったのですが、陳先生のガイドで、貿易港として栄えた基隆市を海の上から観望しました。下船後はバスに乗車し「琉球ウミンチュの像」を見学。琉球と基隆のつながりは深く、一九〇五年頃から台湾に移住するようになり、台湾の人々はその移民に移住地を提供、琉球の人々も漁業技術などを惜しみなく伝えたそうです。戦乱と復興の中で琉球集落は消滅したそうですが、基隆と沖縄の交流を記念したウミンチュの像を見上げながら、双方の絆が深まることを確信しました。

その後、ホテルに入って休憩をはさんだ後、天候や日暮れも考慮し、希望者だけで基隆神社跡を見に行き、鳥居の両端に佇む狛犬を確認しました。

夜は、基隆港海産楼で海鮮料理。解散後はそれぞれ夜市を散策。

第4日・11月25日(日)

この日は打って変わって天気恵まれ、基隆から宜蘭に移動。まず「西郷堤防」を築いた西郷菊次郎・初代宜蘭庁長を記念し、宜蘭川のほとりに建立された「西郷庁憲徳政碑」を見学。この宜蘭川の堤防の建設に当たり、述べ七十四万人が動員、三万九千三百円の建設費用、一年五カ月の歳月がかかれたとのこと。この堤防のお陰で、台風直撃による洪水や河川の氾濫による災害が少なくなり、付近の農民たちの生活は安定し、田畑での農作物の収穫は増加したそうです。

続いては宜蘭設治記念館を見学。この建物は太平山から切り出された檜を使って建築されており、宜蘭の約二百年の歴史を展示する記念館として一般にも公開されています。元々は日本統治時代の庁長官舎で、敷地面積は八〇〇坪もあり、室内の床や畳、障子などはほぼ当時のまま復元されています。

昼食の後には、宜蘭神社跡（現在は員山公園）を見学。日本の神社と同じで、本殿に続く階段がまっすぐ上に伸びています。ただ、参道の傍らには複製の神馬しんまの半身が土に埋まった状態で置かれ、燈籠の基座なども無残に破壊されて放置されているのが見られました。戦後、国民党に接収されて忠烈祠になったとはいえ、非常に理解に苦しむ光景でした。

その後、台湾初の本格製法ウイスキー「カバラン」を作り上げることに成功した金車公司のウイスキー工場を見学。伝統醸造の精神を守りながら、高度な科学技術を加え、高い純度と品質を誇る最高級のウイスキーは、世界の

品評会でも非常に高い評価を得ているそうです。

第5日・11月26日(月)

この日は研修最終日。ホテルで朝食後、李登輝基金会で午前十時から李登輝先生の特別講義です。李先生は、満面の笑顔で研修生五十名を歓迎して下さいました。

特別講義は穏やかな雰囲気が始まりましたが、日台の絆、東日本大震災からの復興、そして「日本人よ、アジアを、そして世界をリードせよ」と鼓舞される先生の文字通りの熱弁に心を打たれました。そして「日本精神はどこに行ってしまったんだ」と問いかけ、

「主導国なき時代へ突入した現代、真の日本人のあり方が問われている」と叱咤激励された李先生のお言葉に、日本人として勇気をいただき、感無量の思いでした。

ご講義の後は、李登輝先生から一人ひとりに研修修了証が手渡され、握手をしていただきました。

私は、このたびの研修で、改めて日台の絆の深さについて気づかされ、この台湾で若い世代に託される日台関係の相互発展に自分なりに努めていこうと誓いました。

李登輝先生をはじめご講義いただいた先生方、事務局の皆様、李登輝基金会の皆様、ありがとうございました。



李明峻先生（第5講 11月23日）



遊覧船で説明の陳先生（11月24日）



西郷庁憲徳政碑（11月25日）



李登輝先生（第6講 11月26日）